

## 光源氏の本当の人物像と考察

国語班：大家真帆 中川白都 八島凜 國森優希 阪井青藍 内角心 南川星蘭

### 要約

本研究の目的は、「源氏物語」の主人公である光源氏に対する現代人の、色男で不実な男だという認識が正しいのかどうかを、源氏と関係をもった身分も年齢も全く違う二人の女性を比較し考察することだ。研究により、源氏の二人に対する対応に大きな差は見られなかった。したがって、源氏は女性たちに対して優劣をつけた判断をして扱いを変えることはしていなかったことが分かった。

### Abstract

The purpose of this study is to discuss Hikaru Genji to clarify whether the imagine of modern people as a man of many loves and impure man is correct or not by having a relationship with him and comparing his response to two women of completely different status and age. The investigation found no significant difference in his response to the two women.

Therefore, it is conclude in this study that he did not deal with women in such a way as to determine their superiority or inferiority.

## 1. 序論

本研究では、源氏物語について研究した。源氏物語は平安時代中期に紫式部によって描かれた長編物語である。光源氏を主人公として宮中での恋愛、権力争い、暮らし、文化などが描かれている。光源氏は天皇の第二皇子で母親の身分が低かったため、臣籍に下るが、やがて上皇と同等の権力を持った。光源氏は様々な女性と関係を持つ色男であり不実な人だと認識されることが多いが、実際はどういった性格の持ち主だったのか興味を抱いたので、光源氏が愛した女性への対応を比較することで考察した。比較対象として、源氏と一度でも関係を持ちそのあとも継続して関わりがあった女性たちから、紫の上と明石の君を取り上げた。この二人を取り上げた理由は、同じ時期に光源氏から愛されているが身分には差があり、比較するうえで適していると考えたからだ。

## 2. 調査方法

原文を読む前に国語便覧の年表、系図などで物語の全体像をつかんだ上で、漫画「あさきゆめみし」「謹訳 源氏物語」を読み、話の流れを把握した。次に、原文により文献調査を行い、紫の上と明石の君が登場する場面を抜粋する。

《1》身分、年齢、源氏とのやりとり、源氏の女性への和歌をピックアップする。その部分に

ついて、班のメンバーで比較し、考察する。

《2》比較対象として、取り上げた文や源氏との出会いと別れについてまとめる。

### 3. 結果

＜紫の上と明石の君の比較結果＞ **【注】原文等の抜粋例は、(1)を紫の上、(2)を明石の君とする**

① 紫の上の父親は先帝の息子であり、明石の君の父親は播磨の役人である。

(1) 「御兄弟の兵部卿の親王など、」 《現代語訳：御兄の兵部卿宮なども、》  
(新編日本古典文学全集「源氏物語①」「若紫」より引用。)

(2) 「かの国の前の守、新発意のむすめかしずきたる家いといたかし。」

《現代語訳：その国の前の国司で、このごろ出家いたしました者が娘をたいせつにしております家は、じつにたいしたものでございます。》

(新編日本古典文学全集「源氏物語②」「若紫」より引用。)

② 紫の上と源氏との出会いは、源氏の病気療養の際に訪れた京都の北山で、紫の上が十歳の時であり、明石の君と源氏との出会いは、源氏の左遷先の須磨で、明石の君が十八歳の時である。

(1) 「中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、」  
《現代語訳：十歳くらいかと思えて、白い下着に山吹襲などの着なれた表着を着て、走って来た女の子は、》

(新編日本古典文学全集「源氏物語①」「若紫」より引用。)

(2) 「うちやすらひ、何かとのたまふにも、「かうまでは見えたてまつらじ」と深く思ふに、もの嘆かしうて、」

《現代語訳：少しためらいがちに、何かと言葉をおかけになるが、「こんなにまでお側近くには上がるまい。」と深く決心していたので、何となく悲しくて、》

(新編日本古典文学全集「源氏物語②」「明石」より引用。)

③ 源氏は紫の上に対して財産分与を行っていた。

明石の君に対しては、源氏が都に戻った後も頻りに手紙のやり取りがあった。

(1) 「さぶらふ人々よりはじめ、よろづのこと、みな西の対に聞こえわたしたまふ。

《現代語訳：上下の人たちを、身分の区別なく、みな西の対に参上おさせになる。》

(新編日本古典文学全集「源氏物語②」「須磨」より引用。)

(2) 「まことや、かの明石には、返る波につけて御文遣はす。」

《現代語訳：そういえば、あの明石の君には、帰っていく人にかどつけて、お手紙を御遣わしになる。》

(新編日本古典文学全集「源氏物語②」「明石」より引用。)

④ 光源氏の和歌の比較

(1) 光源氏の紫の上への和歌

「身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡のかけは離れじ。」

《現代語訳：わたし自身はこうして遠くへ流浪して行こうとも、心はあなたのそばを離れない鏡 みたいに、あなたからかけ離れることはないでしょう。》

(新編日本古典文学全集「源氏物語②」「須磨」より引用。)

#### (2) 光源氏の明石の君への和歌

「このたびは立ちわかるとも藻塩やく煙は同じかたになびかむ」

《現代語訳：今度はたとえお別れすることになっても、あの藻塩を焼く煙が同じ方向になびくように、いずれは必ずいっしょになりましょう。》

(新編日本古典文学全集「源氏物語②」「須磨」より引用。)

以上の比較の結果として、光源氏の、紫の上と明石の君の二人の女性への対応に差は見られなかった。

## 4. 考察

この結果より光源氏は女性に優劣をつけた対応はしていなかったと考察した。一人の女性の前では、その女性のことを一番に想う、誠実な人であったと考えられる。

この考察を踏まえて、もう一度原文を読み、光源氏の誠実さが表現されている記述を抜粋した。

### ① 光源氏が真面目にふるまっていた。

「さるは、いといたく世を憚りまめだちたまひけるほど、」

《現代語訳：ほんとにひどく世間に気がねして、まじめにふるまっていたのだから…》

(新編日本古典文学全集「源氏物語①」「簀木」より引用。)

### ② 光源氏が大切にしている女性たちに、それぞれにふさわしい正月の衣装を平等に贈る衣配り。

「方々に、うらやみなくこそものすべかりけれ」

《現代語訳：御方々がうらやむことのないよう公平に分け与えなければいけないね。》

(新編日本古典文学全集「源氏物語③」「玉鬘」より引用。)

### ③ 光源氏がかつての女性末摘花の困窮を支援する。

「何ごともなのめにだにあらぬ御ありさまをものめかし出でたまふはいかなりける御心にかありけむ。」

《現代語訳：どこを一つとっても普通並みですらないこのお方をわざわざ一人前にお扱いになさるのは、いったいどういう了簡だったのだろうか。》

(新編日本古典文学全集「源氏物語②」「蓬生」より引用。)

## 5. 結論

平安時代は一夫多妻制が認められていて、男性が女性のもとに通う妻問婚が行われており、その方法は現代の恋愛・結婚とはかけ離れている。そんな中でも、光源氏は一人一人の女性に

対して愛のある和歌を送り、平等に贈り物をするなど、現代に生きる私たちにも光源氏の誠実さを感じることができた。

## 6. 参考文献

あさきゆめみし 1～5巻 講談社 大和和紀

謹訳 源氏物語 1～7巻 祥伝社 林望

ビジュアルカラー 国語便覧 大修館書店

新編日本古典文学全集「源氏物語」1～4巻 小学館

阿部秋生／秋山虔／今井源衛／鈴木日出男 [校注・訳]